

高敏感者 (HSP) と自閉スペクトラムの感覚特性

—感覚プロファイルを用いた分析—

227B005 西岡 千里

問題

自閉スペクトラム症者 (以下 ASD) の感覚の特徴として、感覚過剰反応 (感覚過敏)、感覚低反応 (感覚鈍麻)、感覚探求の3つがあげられ、DSM-5 から診断基準にもその感覚特性が追加された (高橋・神尾, 2018)。Highly Sensitive Person (以下 HSP) も聴覚・視覚・触覚・嗅覚などに特異な感覚処理感受性を持つとされている (Aron et al., 1997)。このように、両者とも特異な感覚特性を持っているが、具体的な感覚の類似点や相違点を研究したものは少ない。そこで本研究では、HSP 傾向者と ASD 傾向者の感覚特性を、感覚プロファイル (sensory profile, 以下 SP) を用いて検討した。

方法

参加者 学部・大学院生 100 名が参加した (有効回答数 89)。

手続き 質問紙による調査を行った。HSP 傾向は、高橋 (2016) の Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) を用いた。ASD 傾向は、若林・東條 (2004) の AQ 指数を用いた。感覚特性の評価については、日本版青年・成人感覚プロファイル (SP) を用いた。SP は、低登録、感覚探求、感覚過敏、感覚回避の4象限で感覚処理のパターンが説明されるものである。

倫理的配慮 本研究は、比治山大学倫理審査委員会による倫理審査を受けて承認された (申請番号 2211)。

結果

HSP 傾向と ASD 傾向の相関関係

HSP 傾向と ASD 傾向の間には比較的弱い正の相関が認められた ($r = .297$)。

HSP 傾向、ASD 傾向と感覚特性 (SP) との関連

HSP 傾向も ASD 傾向も、SP の感覚過敏、感覚回避、低登録と有意な正の相関を示していた (Table1)。

Table1 HSP 傾向と ASD 傾向の感覚特性

	HSP合計	AQ合計
感覚過敏	.520 **	.305 **
感覚回避	.398 **	.423 **
低登録	.278 **	.427 **
感覚探求	-.042	-.202 +

SP 間の相関関係

感覚過敏と感覚回避 ($r = .622$)、低登録と感覚過敏 ($r = .539$)、低登録と感覚回避 ($r = .435$) の間にそれぞれ有意な正の相関が見られた。

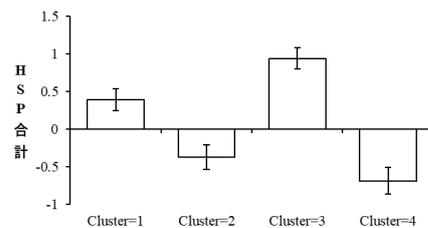
クラスター分析を用いた参加者の分類

HSP, AQ, SP の全ての下位尺度を用いてクラスター分析 (Ward 法) を行った。その結果、参加者は4つの群 (I 群:14 名, II 群:28 名, III 群:23 名, IV 群:24 名) に分かれることがわかった。

HSP 傾向に関する4群の分散分析

HSP 合計得点を従属変数として4つの群を参加者間要因とする1要因分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(3,85) = 20.813, p = .000, \eta^2 = .423$)。そこで、Holm 法の多重比較検定を行ったところ、HSP 傾向は、高い方から III 群 \approx I 群 $>$ II 群 \approx IV 群の順であることがわかった (Figure 1)。

Figure 1 各群の HSP 傾向

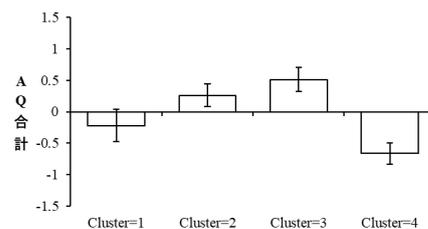


なお、HSP の下位尺度について統計的に有意な主効果が得られたものは、低感覚閾 (III 群 \approx I 群 $>$ II 群 \approx IV 群)、易興奮性 (III 群 $>$ II 群 $>$ IV 群; I 群は III 群と II 群の間)、美的感受性 (III 群 \approx IV 群 $>$ II 群; I 群は IV 群と II 群の間) であった。

ASD 傾向に関する4群の分散分析

AQ 合計得点を従属変数として4つの群を参加者間要因とする1要因分散分析を適用したところ、群の主効果が有意であった ($F(3,85) = 7.774, p = .000, \eta^2 = .215$)。下位検定の結果、III 群 \approx II 群 $>$ IV 群 (I 群は II 群と IV 群の間で各群と有意差なし) であった (Figure 2)。

Figure 2 各群の ASD 傾向



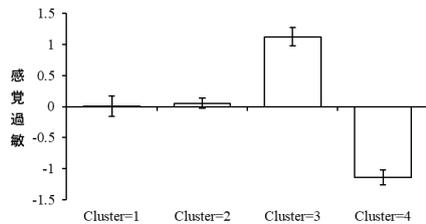
なお、AQ の下位尺度で統計的に有意な主効果が得られたものは、ソーシャルスキルの問題 (II 群 $>$ IV 群; III 群と I 群はその間)、注意の切り替えの問題 (III 群 $>$

I 群 \equiv IV群; II群はIII群と I 群の間), コミュニケーションの問題 (III群 \equiv II群 $>$ IV群 \equiv I 群), 想像力の問題 (II群 $>$ IV群; I 群と III群はその間) であった。

感覚特性(SP)に関する分散分析

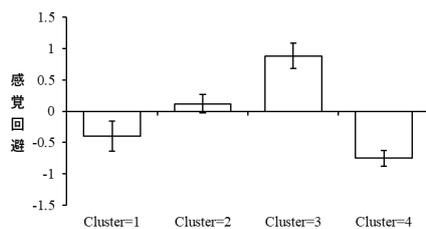
感覚過敏は主効果がみられ ($F(3,85) = 59.787, p = .000, \eta^2 = .678$), 下位検定の結果, III群 $>$ II群 \equiv I 群 $>$ IV群であることがわかった (Figure 3)。

Figure 3 各群の感覚過敏



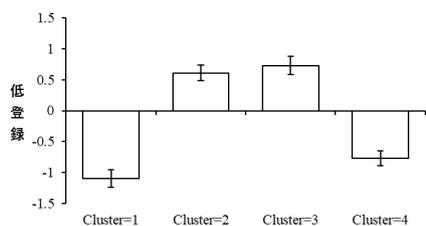
感覚回避も主効果がみられ ($F(3,85) = 17.638, p = .000, \eta^2 = .384$), 下位検定の結果, III群 $>$ II群 $>$ IV群 (I 群はII群とIV群の間で, III群のみと有意差あり) であった (Figure 4)。

Figure 4 各群の感覚回避



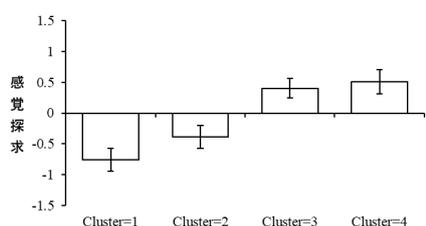
低登録も主効果がみられ ($F(3,85) = 43.319, p = .000, \eta^2 = .605$), 下位検定の結果, III群 \equiv II群 $>$ IV群 \equiv I 群であることがわかった (Figure 5)。

Figure 5 各群の低登録



感覚探求も主効果がみられ ($F(3,85) = 9.435, p = .000, \eta^2 = .250$), 下位検定の結果, IV群 \equiv III群 $>$ II群 \equiv I 群であることがわかった (Figure 6)。

Figure 6 各群の感覚探求



考察

本研究の結果, HSP 傾向と ASD 傾向には弱いながらも正の相関があった。感覚感受性についても, 感覚過敏と感覚回避の間に正の相関があるだけでなく, それらの特性と低登録との間にも正の相関がみられ, 感覚過敏で感覚刺激を回避する傾向がある者が, 鈍さも併せ持つことがわかった。クラスター分析の結果, III群がその特徴を有していた。III群は感覚過敏と感覚回避を示す一方で, 低登録で感覚探求をする傾向があった。彼らは下位尺度も含めて典型的な HSP 者であったが, 同時に, ASD 傾向ももともと高く, AQ 下位尺度では, 注意の切り替えとコミュニケーションに問題を抱えていることがわかった。同じ HSP 傾向が見られた群として I 群が挙げられるが, 彼らは感覚過敏や感覚回避などの特異な感覚特徴は有しておらず, ASD 傾向も低かった。また, コミュニケーションが得意で想像力も高い傾向が見られた。また, II群は HSP 傾向は低いが, ASD 傾向はIII群と同程度に高かった。

ASD 者の感覚特性は人によって異なることが明らかになりつつある。井手 (2018) は, ASD 者の感覚処理障害の背景にある知覚認知特性を実験的に可視化する研究をレビューする中で, ASD 者がどのような感覚特性を有しているのか, 具体的な調査が行われ, その科学的理解に基づく支援が必要だと述べている。今回の研究から, HSP も ASD 同様, ひと塊の人々ではなく, 感覚過敏と鈍麻, 感覚回避と探求の間で苦慮する人がいる (そしてその人は注意やコミュニケーションにも問題をもつ) 一方で, 鈍感さと無縁で強い刺激を好まないだけの人もいる事が分かった。しかし, HSP についてはまだ具体的な感覚特性の研究が進んでおらず, HSP であるか否かの判断基準も曖昧であるためか, 支援方法が確立されていない。このような人々の感覚特性の理解は, 今後の支援には欠かせないものとなってくるのではないだろうか。

引用文献

- 高橋 亜希 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成. 感情心理学研究 23, 68-77.
- 高橋 秀俊・神尾 陽子(2018). 自閉スペクトラム症の感覚の特徴, 精神神経学雑誌, 120,5,369-383
- 若林 明雄・東條 吉邦 (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— 心理学研究, 75, 78-84.
- 井手 正和 (2018). 感覚過敏の神経生理過程が明かす自閉スペクトラム症者の感覚経験 2018 年度日本認知科学会第 35 回大会論文集, 161-165.